

マツル共斗の中にそれを止揚していく必要があることを確信しつつ、今後の共斗に
それと共に、この共斗の中で形成されていくべき三連線が出現することを望んでおられる。また、
この共斗において、前述した但々の関係性をどうしようとする必要は固く置かれた。オナワチ、
藤澤節とサークル諸派の両者の三連線を媒介とした関係性であり、それは同時にサークル諸派の個性性まで
を包摂した二つの関係性であり、この二重の関係性を通じて藤澤節に追求しない限り、真のハコバシに
シテハコバシの立場は、前述した三者の内家を見たり見たりと考える。個別の共闘を媒介として、
これまでの「海を媒介」とした関係性（はな）は、主体（書まき）と客体（読まき）の関係性、互いの立場を訂正
必要である。それをやめ、中々直に当直の分断攻撃（サークル諸派の）に打撃を与えるであろう。
このように形において、斗われてきた、明大新聞学生共闘は、7、8月評議委員会闘争に於いて、われわれの、
学生共闘で愛敬され、一応の勝利を圧倒的に勝ち取ることであった。このことから、理直会、とりわけ今のタム
ーまの月日のつづき攻撃もこのころをねらわれない。学生共闘は戦後まで、明大新聞学生共闘は終
ない。また、これまでの明大新聞学生共闘を巡りてきた課題をさらに現場で展開するのみ、この共闘を断つ新
聞に如何に生かすかなあつて、その意味において明大新聞学生共闘は、簡理、支配体別解はまた終極に
ない……。

メモ(口述筆記)